

## 巻頭言

2023年5月から新型コロナウイルス感染症の位置づけが「新型インフルエンザ等感染症（いわゆる2類相当）」から「5類感染症」になり、人々の生活は再び2019年12月以前の活気を取り戻しつつあります。ここ数年オンラインで開催されていたイベントや会議もオンサイトで実施されるようになりました。当専攻の多くの研究室が関わる学会（高分子学会）は2022年秋から既に対面での開催となり、2023年は年次大会と討論会ともに通常通り対面にて行われました。海外での国際学会への参加・発表の件数も増えており、再び人々の交流が盛んになったことを実感しています。

さて、2023年度の本学理学研究科高分子科学専攻所属メンバーが関わる出来事をご紹介します。4月1日付けで高島義徳教授が、大阪大学高等共創研究院から高分子構造・物性・機能論大講座・高分子材料設計学研究室へ配置換えとなり、当専攻の豊中キャンパス基幹講座は7研究室から8研究室に増えました。嬉しいことに、当専攻所属のスタッフや学生が所属学会において複数の研究・論文発表賞を受賞したとの報告が届いています。この3月には2000年から高分子合成化学研究室を主宰されてこられた青島貞人教授が定年退職され、大阪大学名誉教授の称号を授与されました。

当専攻の博士前期課程・博士後期課程学生数について、最近数年の動向を見てみると、博士前期課程へは毎年コンスタントに多くの本学学部生が進学を希望し、学外からも多くの入学希望者がおられます。一方、博士後期課程定員充足率はコロナ禍前後で一気に変化しました。2020年度までは理学研究科6専攻中最も高いか2番目の充足率を保っていましたが、2021年度から博士後期課程在籍者数は減少傾向となりました。高分子科学は人類の経済活動に大きくかかわっているが故に社会の景気動向に影響されやすく、学生が早く就職したいと考えたように思われますが、2024年4月時点での当専攻博士後期課程入学定員充足率は再び2020年までの高い数値に戻りました。多くの留学生や社会人ドクターも迎えることができ、今後の当専攻での研究活動がますます活発になりそうです。

本冊子は2023年度の高分子科学専攻所属研究室の主な研究活動内容と2023年の業績、本専攻修了者の論文題目と進路をまとめたものです。今後とも高分子科学専攻への相変わらぬご理解とご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

(令和5年度高分子科学専攻長 山口浩靖)